

---

# **距離感**

赤村 道夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

距離感

### 【Zマーク】

Z7049A

### 【作者名】

赤村 道夢

### 【あらすじ】

阿笠邸にやって来たコナン。しかし、コナンにはある思惑が……

(前書き)

初の小説です。どうやらなにといふのもあると懇こまゆが「勘弁を

ある土曜日の夕方のこと。

「お～い、博士～」

今日も阿笠邸のリビングに、勝手知ったる他人の家とばかりにチヤイムも鳴らさないで入ってきた、コナンの声が響く。

「博士は今日学会で帰つてこないわよ。」

と、リビングで雑誌を読んでいた哀が、雑誌から田を離さずに言った。

「マジかよお～？追跡メガネのバッテリー やばいのに。」

はあ～、つとため息をつきつつコナンが言った。

「しょうがないでしょ～。また明日にでもきなさい。」

尚も雑誌から田を離さずに言った。しかし、さすがの哀も次の発言には顔を上げることになる。

「じゃ、今日はここに泊まつてくれか。」

と、当然のようにコナンが言ったのだ。

哀が驚き顔を上げると

「しようがないだろ。お前一人じゃ危ないし……それに、今日は土曜だし平氣だろ。」

と、取つて付けた様な理由を言つている。

「平氣よ。組織が私のことに気付いたならとっくに殺られてるわよ。それに、体は子供でも、精神は大人なんだからあなたと居る方が危ないわ。」

と、返すが最早コナンは聞いていないようだ。

「じゃ、俺は蘭に電話して来るから。」

と、言うとさっさと行つてしまつた。

「コナンが行つてしまつと、哀は声に出さずに（まったく、急に決めるんだから……それにしても一人だけなんて……）

と、考え、思わず顔を赤らめた。そして、コナンが戻ってきたために、哀は慌てて顔を背けた。

「灰原…泊まって良いってさ。これで決定だな。」

と、コナンは笑いながら言った。

それを見て哀は

(こっちの気も知らないで……)

と、思わずにはいられなかつたが、口には出せず、

「そう…じゃ、あなたは博士の部屋で寝てね。」

「分つてるよ。じゃ、俺は小説でも読んでるから。」

と、言つて持つて来ていた荷物の中から、小説を取り出し、読み始めた。

哀も雑誌を読むのを再開したが、ふと気になつて、

「そういうえば何で、小説なんて持つてきてるのよ。追跡メガネの充電にはそんなに時間は掛からないから、時間を潰す必要は無い筈よ。」

と、訊ねてみた。

「この新作面白いから、いつも持ち歩いてんだよ。」

「そう…相変わらずの推理マニアっぷりね。」

と、皮肉で返したが、心の中では

(まあ……私はそんな貴方のことを……)

と、考えていた。

それから少一時間程たつて、

「そろそろ夕食にしましょうか。」

「ん?ああ、そうだな。もうこんな時間か。この小説があまりに面白くて時間を忘れちまつたぜ。」

「まったく。本当に推理マニアなのね。」

「うるせーな。別に良いだろ。それより、夕飯どうすんだよ?」「今から作るからちょっと待つてて。」

と、言つて哀はキッチンの方に向かつて行つた。

それから數十分程経つて

「出来たわよ。工藤君。」

と言つ哀の声が聞こえたので、コナンは夕食を食べに向かつた。

「「いただきます。」」

「飯を食べる前の定番の挨拶をし、一人は夕食を食べ始めた。  
「なあ、灰原…お前つて意外と料理とか上手いけど、組織にいた頃も作つてたのか？」

「そうね。この体になる前も基本的に自炊してたから。  
(まさか、あなたに食べてもらいたかったから、なんて言えないわよね……)

「ふ~ん。そうだつたのか……」「ちそつさめ。」

いつの間にかコナンの皿は空になつていた。

「ふ~。うまかった。」

コナンは満足そうな表情を浮かべ水を飲んでいる。

「「ちそつさま。」」

その内に哀も食べ終わり、一人は風呂に入る」とした。

「灰原…お前が先入つて良いぞ。」

「当たり前でしょ。」

と、言つて哀は風呂場に向かつて行つた。

コナンは

(まったく…もつむけひと素直にしてれば可愛いのに……)

と、思つたが

(まあ良いか……それがあいつひじわつてやつだし……にして  
も、あいつが風呂から出るまで暇だな……小説の続きでも読むか…  
…)

と、思い直し、また小説を読むことにした。

しばらくして哀が風呂から出で、コナンが入ることになつた。

「ナンもしづらして風呂から出た。

しかし、哀には疑問に思うところがあり、ナンに聞いてみた。

「あなた……どうしてパジャマなんて、持ってきてるの？」

すると、ナンは少し慌てて

「い、これはだな……」

「もしかしてあなた、最初から泊まる気だったの？」

と、思ったことを率直に述べると、ナンは何も言ひ返せない様だったが、その態度が雄弁にも肯定を示していた。

「呆れる……どうして？」

と、聞くと、少し顔を赤らめ

「そ、それは……お前と一緒にいたかったからだよ……」

と、ナンは答えた。

「えつ……？そつ、それつて……？もしかして……」

と、言うと哀も顔を赤らめ、俯いた。

「その先は、もつとちゃんとした所で言わせてくれよな……」

一人の距離は、当人たちが思っていたよりも近かつたようである。

(あわじ)

## (後書き)

前書きにも書いた通り初めての小説です。  
自分の書いた小説が、どの程度の物か知りたいので、  
もらえると、とても嬉しいです。  
感想を書いて

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7049a/>

---

距離感

2010年12月9日22時43分発行